



2015  March

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	1	2	3	4

「セレッソの花、苦手なんですか？」

セレッソの樹が風に揺れ、花びらが空に舞うのを眺めていると隣を歩いていたフレイが俯きながら訊いてきた。
——レオンさんは時々、寂しそうな顔をしています。
いつだったか、彼女に言われた言葉を反芻する。
確かその時も伏し目がちだったように記憶している。と、いうことは。

「そんなに寂しそうな顔してたか？」「はい。今もほら、寂しそうです」
「そうか…。まあ、セレッソの花は嫌いじゃないけどな。ただ…」
「…思い出すんですか？」
「ああ。守り人になった日のことをな」

セレッソの花が舞う中で涙をこらえていた幼馴染みの姿が脳裏に甦る。
幸せになったのだと知った今もその記憶は色褪せることはない。

「嫉妬してるのか？」
「…少しいだけ。だって、私というのに他の人のこと思い出してますから。
それも、レオンさんの大切な人で…そんなの、ずるいです」

顔を少し赤めながら、以前は言わなかったであろう本心を素直に言葉にする彼女が急に愛しくたまらなくなり、そっと頬に触れる。

「じゃあ、俺と一緒に思い出を作ってくれ」
「え？」「時間はたっぷりあるんだ」

——俺の未来はアンタということで初めて紡がれる。
だから、どうか。懇願するように優しく、褐色の手がフレイの頬を撫でる。

「セレッソが愛しくなるくらいに、アンタとの幸せな思い出を俺に欲しくないか」
「……!」

ただ目を見開かせてレオンを見つめていたフレイは、やがて顔を綻ばせた。

Illustration & SSS：日時